司馬遼太郎

春灯雑記

朝日新聞社

春灯雑記

司馬遼太郎

春灯雑記

一九九一年十一月一日　第一刷発行
一九九二年一月十日　第五刷発行

著者　司馬遼太郎
発行者　木下秀男
発行所　朝日新聞社

〒104-11　東京都中央区築地五-三-二
電話　〇三-三五四五-〇一三一(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇-一七三〇

印刷所
製本所　凸版印刷

© RYŌTARŌ SHIBA 1991

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-256352-4　Printed in Japan

目次

心と形　5
護貞氏の話——肥後細川家のことども　49
仄かなスコットランド　135
踏み出しますか　191
義務について　221
あとがき　267

装幀　安野光雅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春灯雑記

心と形

へんな題名ですが、この題名でいう心とは霊（ソウル）のことだと思っていただきます。形とは肉体のことです。

内容は、多分、私自身が、どうもヘンだなとおもっている疑問をきいていただくだけということになるでしょう。私は子供のころから、日本人の世界におけるこの二つの関係がふしぎでした。

私の家の宗旨は浄土真宗ですから、死ねば私はお浄土へゆくことになります。しかし、私を構成している何がゆくのでしょう、髪の毛がゆくのか、日本仏教は、遺骨遺骨といいますから、骨がゆくのか。

しかしそれらは単に物質ではないか。お釈迦さんも、肉体は物質だという意味のことをおっしゃっています。

「死んだら、なにがお浄土へゆくのでしょう」

お坊さんにきいても、おそらくはっきり答えてくださらないはずです。こんなことに答えると、お坊さんのお仕事にさしつかえるかもしれません。

「あなたのぜんぶがゆくのではありますまいか」

とおっしゃった良心的なお坊さんがいらっしゃいました。

しかし私のぜんぶといっても、肉体的には齢とともにちがいます。私はくたびれやすい年齢になっています。こんな衰えた肉体がゆくよりも、若いころの元気な肉体がゆくほうがいいにきまっています。

むろん冗談です。肉体は、細胞からなり立っています。時々刻々変化しています。変化することの総和が生命で、写真で撮るようにその瞬間の生命を固定することはできません。だから「ぜんぶ」といっても、いつの瞬間のぜんぶかというややこしいことになり、そもそもそのような固定的瞬間というのは生命にはありえないのです。

釈迦の仏教は、朗々として明快でした。時間によって変化するということを踏まえきった上で、空（数学でいう0）という世界を構築したのです。

しかしお釈迦さんのように明快すぎては、仏教はながくは民衆のなかで根づきません。げんにインドで衰弱し、日本仏教もまた土俗思想と癒着し、かろうじて存在しています。

世界じゅうの未開時代には、ヒトダマ、ユウレイ、つまり死後も肉体を離れてうろついて

いる、あるいは生きつづける、という人格的な霊魂（アニマ）が存在するものと信じられていました。

とくに日本の古代からの土俗信仰では、根づよくそのようでした。

たとえば、日本では、怨みをもって死んだ人の霊魂はいきいきとして他の人間に対して作用をするというのです（御霊（ごりょう）信仰）。

御霊信仰は、九世紀にははっきりとあらわれています。京都の上御霊（かみごりょう）神社や下（しも）御霊神社がその代表的なもので、政治的にうらみをのんで亡くなった人がこの世にたたりをなすという信仰です。仏教とも習合してきました。そのようなアニミズムにあっては、なお肉体はアニマの仮の宿である、と考えられてきました。つまり肉体のはかなさや有限性が前提になっています。肉体が滅んでも、死霊だけは地上にあってこうこうと輝き、活（い）きて働き、人のくらしや運命に影響をあたえます。地震や火事をおこさせたりもする。まことに、人は死霊になったほうが、賢くて働き者であるかと思えるほどです。菅原道真公の死霊をまつる天神信仰がその代表的なものでしょう。朝敵平将門（たいらのまさかど）をまつる神田明神もそうです。道真さんも将門さんもお浄土に行って、蓮の花の上にすわっておられるといったようなのどかなものではないのです。

ここで、お浄土についてのべておきます。

半世紀前、北陸あたりには、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お他力さん」

とよばれる熱心な門徒（浄土真宗の宗徒）がいました。他力とは、阿弥陀如来の本願ということであります。それが自分を救ってくださる、ありがたい、ありがたい、と念仏をとなえているうちに、いつのまにか、禅のような自力で悟った人よりも宇宙に同化してしまっているようになっている。話がわき道にそれますが、この思想が、柳宗悦の民芸思想の基盤になったり、棟方志功の絵画思想を成立させたりしました。

十三世紀の親鸞は、そういう門徒たちの教祖であります。親鸞によって出発した浄土教的日本仏教は、明快さにおいてまことにみごとなものであります。浄土教は救済（原始仏教には救済の思想はありませんでした）を説きつつも釈迦以来の空の思想の上に成立しています。しかも、それまでの仏教のなかに混在していた非仏教的な枝葉のいっさいをとりはらった思想でした。

親鸞の浄土思想はまことに簡便で、

「空」

という大思想を、阿弥陀如来という唯一名にしたという大胆なものでした。

阿弥陀如来は、つまり空は、悪人も善人もわけへだてなく救ってくださる、……あたりまえのことで、みな死ぬということです。悪人も善人も死の前には平等なんです。〝みな死ぬ〟

とはいわず、ことごとく救済される、という。価値が転換されたのです。驚天動地の転換でした。

空は、万物を死なせ、うまれさせる、それが空の本願である、死ではなくて、往って生きること（往生）なのである、このように転換して考えればまことにありがたく、私どもとしてはひたすらに感謝して、御名を唱えまいらせねばなりません。

くりかえすと、人は死ぬ、善悪とかかわりなく死ぬ、みな死ぬのです、一切空なのです。

しかしながら、親鸞は空は永遠のもので、しかも光だというのです。無量寿にして無量光。空は光だからこそ、いっそそのことを讃えましょう、ということです。すばらしい教義だと思います。

しかし、古代以来の霊魂の問題を、皮一重であいまいにしたままこんにちに至っているのは、残念なことです。むろん、浄土真宗は霊魂など存在しない、という立場です。だから、浄土真宗は御霊信仰を否定します。

さらにいえば、浄土真宗だけでなく、仏教そのものが、人間には霊魂があって、肉体がある、というようなキリスト教的な霊肉二元論はとっていません。

そうなると、親鸞思想（浄土真宗）にあっては何がお浄土にゆくのか、朽ちはててゆく肉体をふくめてぜんぶがゆくのか、という点で、あいまいさが残るのです。

浄土真宗にかぎらず、本来の仏教にとっては霊魂などは存在しません。

先祖が冥々裡に現世に影響をあたえるという意味での祖霊思想も仏教にはありませんし、菅原道真の怨霊がたたりをおこなったという御霊思想も、むろん存在しません。化ケテ出テヤルゾ、というのは日本の土着思想であって、仏教にはありません。

中世の物語に、仏教の坊さんがお経を誦んで怨霊をしずめた、というのが多いのですが、それらは民間説話を仏教の宣伝に用いたのであって、釈迦の法にはそういう思想はありません。仏教は陰火の燃えるようなえたいの知れない、じめじめした景色の世界ではなく、はるかに大きく、もっと説明可能の世界です。徹頭徹尾明るい思想なのです。日本にきてちょっと陰気になっただけです。

人間個々の固体のしんはなにか、ということになると、キリスト教では、日本の土俗信仰の霊魂でなく、霊魂であるとします。このことについては、あとでのべます。

仏教は、キリスト教とは根底からちがった思想ですから、霊魂に相当する概念がありません。

強いて——まことにむりやりに言いますと——仏教における霊魂は、〝我〟であります。〝我〟とは、人間一個を煮つめて凝固させたようなものであって、キリスト教における霊と

肉というような、それぞれ単独で個別的な、あるいは対立するものではありません。

ここで、余談を挿入します。

私が、霊と肉（心と形）などという、古めかしくて退屈な主題についてなぜ喋っているかについてです。

臓器移植に関係しておられる医者に何人かの知人がいて、対社会的な認証やら理解やらをえることの臨床家としての困難さについて打ちあけられたことが何度かあります。

欧米では無私なるドナーが多くいます。日本では、自分の臓器を――死後といえども――他人にやるということをためらう気分がふつうです。

「私の臓器をどうぞ」

と、なかなかひとびとは言ってくれません、とその医者がこぼしていました。私にとってこの課題は深刻でした。なぜなら、私は作家のくせに、人間一般についてよりも、日本における人間についてということを考えてきたからです。われながらそれが矮小だとはわかっているのですが。

「ひょっとしたら、十三世紀以後、怠けつづけた日本の仏教界のほうに問題があるのではないでしょうか。いまになって、日本の古代以来の精神風土と対決――それも医者が――せねばならぬというのは悲惨ですね」

と、感想をもらしたことがあります。その後、この感想をひとびとにきいてもらおうと思いたっ

て、このように喋っているのです。この稿は、ことし（一九九〇年）の晩春、東北大学医学部の同窓の会で話した内容に、手を入れたものです。

さて、〝我〟というのは、私なら私という者のしんらしいのです。

〝我〟は、古代インドの正統バラモン思想の淵源とされる「奥義書（ウパニシャッド）」の世界では、アートマン（梵語（サンスクリット））というまことにひびきのいい単独の術語であらわされています。個我のことです。

中国仏教や日本仏教では、ただ単に〝我〟といいます。近代以前の日本語世界で、「あの人は我がつよい」とか、「我利我利亡者」とか、「我を殺せ」とかというように、大変虐待されてきた概念です。

しかし本来の仏教にあっては、個々の生命は〝我〟であり、〝我〟はすばらしいものになる可能性をもったものとされます。なぜなら〝大我〟というのは、諸仏のことなのです。ただし、仏教はつねに二律背反的な表現をとります。〝我〟は幻だともいいます。

大変ややこしい問題をごく簡単に申しますと、霊魂（ソウル）がキリスト教の根本思想に根ざしているように、〝我〟は仏教の根本思想に根をもっています。ところが、キリスト教が、霊魂（ソウル）はどうあるべきか、というのに対し、仏教では、こまったことに、我を説きつつも、「〝我〟な

ど実在しない」というのです。「いわば幻である。〝我〟は絶対的に実在しているものではなく、〝縁起〟として（関係として）存在しているだけのものだ」とにべもありません。

縁起というのは、
「縁起がいい」
のあの縁起のことです。

つまり相対的な関係性のことです。〝あれが生じたから、これも生じる〟というようなものです。〝あれが滅したから、これも滅する〟、あるいはそれが縁になって〝生ずる〟ということでもあります。〝我〟というのはそういう相対のあやちのなかに点滅しているだけのものだ、というのです。

キリスト教の霊魂の尊厳に比して、なんとあわれな存在であることでしょう。

まことに仏教は薄情です。もっとも仏教におけるこの薄情さが最高のすばらしさでもあります。同時に仏教のもっともつまらないところでもあります。

なにしろこんな思想では、現実に懸命に生きようとしている人間に対し、あるいは存亡の危機からはいあがろうとする文明に対し、まことに無力にもなってしまいます。「お前さんたちが自分だとか人類だといっているのは仮の現象にすぎず、文明というものも幻なんだよ」というだけでは、たとえば、いま世界じゅうが地球を守ろうとしているとき、へのつっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com